

高田三郎 江藤太郎 野村良雄 三先生追悼記  
(†94.5.12) (†92.7.22) (†94.2.4)

今道友信

相次いで帰天された三先生の中世哲学会草創期の思い出を辿り、本学会に対する久しきにわたる御功績をしのぶよすがとしたい。

三先生とも昭和27年5月5日東大山上御殿での第1回大会で選出された委員で、高田、江藤両先生はその半年前の昭和26年11月3日東大文学部哲学研究室に集まった中世哲学会設立準備委員会七名に属していた。他に大庭征露、J・ジームス、高田武四郎、V・プリオット、松本正夫の五先生が出席された。会議は一時から六時までかかり、議題は、会規案の決定、発起人の人選と依頼状の文案、委員会構成、研究計画、学会名称であった。当時大学院学生であった私は書記役として末席に列っていたから、印象的な事は記憶している。それらを書くことが自ら三先生に捧げる追悼の賦となるであろう。

準備委員会には委員長がなく、その日の会議も議長なしで始まり、具合よく終わった。実状は、高田、江藤、松本の三先生がそれぞれ分担して用意した議案を説明し、その際提案者が臨時議長を兼ねるという不思議な運営であった。この会は欠席した長沢信寿先生を含めても圧倒的にカトリック教徒が多かったが、その日の話し合いで、正式の委員会が成立した暁には、委員長に、戦前から故岩下壮一神父と並んで西洋中世哲学の日本における開拓者であったプロテスタントで東京女子大学長の石原謙先生を推す案がまとまった。京都大学には国立大学唯一の中世哲学講座があり、上智大学には中世哲学研究所があるにも拘らず、それぞれの主任高田、江藤両先生が上述の案を提唱したことは、中世哲学会が最初期から、宗派や学閥にとらわれず、全国的な研究体制の育成を考えるよい伝統を用意していたあかしである。

学会名を最終的に決定するに際し、「中世思想学会」として多数の会員を

獲得すべきであるとの意見が伝えられていた。P・エグリ、近山金次、仁戸田六三郎、野村良雄の四先生からであった。しかし、中世哲学はそれ自身固有の研究中心を全国的組織としてもつべきである、との考えが準備委員会の一貫した姿勢として再確認され、「中世哲学会」として登録することに決定した。数年後、機関誌発行が可能となった時、誌名は「中世思想研究」となったが、それは委員会における仁戸田、野村両委員の意見が採択されたからである。中世の神学、宗教、芸術、教会史、教会法などの論文を受け入れる可能性を明示する名称がよいというその論拠は、多数の賛意を得た。

野村先生は音楽美学の研究者で、中世の典礼に注目しながら、上智でのトマス研究会に出席し、武田信一先生のトマスにおける美の超越性の説の支持者であった。その温厚高雅な風格は典礼美学の研究者にふさわしかった。

高田先生の「翻訳は身を鍛えながらの社会奉仕である」というお考えがなかったら、トマス『神学大全』の全訳の大事業はここまで進捗していなかったであろう。山田晶、稲垣良典両教授を始めとする多くの学者が後を継いで順調であるが、訳書最初の二巻は高田先生一人の担当であった。先生を気難しいと言う人は多いが、私にはやさしく、「人が判ってくれない僕の本当の仕事だ」という *suppositio* についての確かに判りにくい話を京都のお宅で夜半まで伺ったこともある。

江藤先生のお宅ではトマスの『*De ente et essentia*』を読む会が続いた。愛犬のカラーが顔を見せると先生よりも賢そうに見えた。それ程も先生は謙遜であったが、学問では厳しい自己主張があり、ミュンヘン図書館蔵の自然学註解写本については、発見者で泰斗のグループマンの説に真向から反対し、これはシゲルスの著作ではないとする論文でわれわれを魅了し去った。機関誌初期の傑作である。

加藤信朗委員長と編集委員会の委嘱により、自ら決して適任とは思わないが、三先生の思い出を録し、以て追悼の辞としたい。